開会式　祝辞・励ましの言葉

市民CSWer研修会in福島の開講に際し、一言お祝いの言葉を述べさせて頂きます。

全世界を巻き込んだ新型コロナウイルスにより、市民生活に様々な行動制約が成される中にあって、CSWerの存在を世に問い続けることは、地域福祉の推進に並々ならない決意と想いがあってのことと拝察しております。

一方、コロナ禍にあっては、これまでの当たり前に大きな変更を余儀なくされており、この様なときだからこそ、「顔の見える関係」の大切さが改めて見直され、これまで以上に、この研修会の持つ役割が大きくなっているとも言えます。

今日、我々の住む社会は、高度に発達して様々な制度が充実し、一見、市民生活の安全・安心が担保されているかのように思いがちです。しかし現実の社会はどうでしょうか。

地域包括ケアシステムの構築という名を借りて、介護サービス基盤への住民参加が求められ、介護保険財政の立て直しに駆り出されています。

また、少子高齢化した人口減少社会は、静かな有事とも表現され、これまで我々の社会を守ってきた様々な仕組みは、制度疲労を起こし限界に来ています。

一方、こうした社会情勢の変化を迎え撃つ我々の振る舞いはどうなのかというと、

近隣関係の希薄化、行き過ぎた個人主義、市場経済に委ねすぎた日常生活等々、生活基盤の脆弱さを露呈しています。

共に暮らす地域社会での支え合い・助け合いは、特別のことや弱者救済的色づけがなされ、全ての人々に関わる「あたりまえの姿」とは、隔たりのある現状です。私たちが暮らす地域社会は、これまでにも増して生活のしづらさや息苦しさが増していると思います。

しかし、こうした状況は、同時に、今こそ我々は、我々の生活を足下から考え直す、好機を手にしているとも言えるのではないかと考えます。

この好機に際しては、共に心を振るわせ、共に憤慨し、共に喜び合う、学びの場が必要だと思います。

市民CSWer研修会in福島は、正に、このことに応える『場』なのではないかと思います。

問題と課題は違います。問題は、単なる目の前の現象しかみていません。しかし、課題意識は、この社会がどうであって欲しいのか、どうありたいのかを明確に持っての提案です。

共に学ぶ仲間の存在は、社会の様々な課題に目を向け、疑問に目をそむけない姿勢を持ち、そしてこれからの地域社会をどうしたいのかを真顔で話す皆様には、非常に大きな支えになるはずです。

皆様は、この研修会を通して、それぞれの立場で学びを生かして行くことになりますが、これまでにも増して仲間の存在が大きくなると思います。今回、志を一つに学ぶ一人ひとりが仲間となって、新たな地域ネットワークを形成し、活気ある地域社会を創る源になってくれるものと信じています。

市民CSWer研修会in福島の開講を心からお祝いし、ご挨拶と致します。

令和３年６月２６日

地域福祉研究所　主宰　本間照雄